

最後に長崎県の南高愛隣会理事長の田島光浩氏が、「障がいがある人達の、普通の場所で愛する人との暮らしの実現」を目指して平成15年に法人内に開設された「結婚推進室ぶ〜け」を紹介されました。「ぶ〜け」開設前の法人の状態は男女別棟・恋愛禁止でしたが、愛する人がいる利用者のキラキラ輝いた表情に気づいて方向転換、幸せ作りの支援が始まりました。しかし大事な家族を預かっているという意識から賛成しない職員も少なくないとのことで、支援者の内に存在する障がい者の恋愛・結婚への偏見と無理解を打破して、本人達はもちろん家族の心情にも配慮しながら、現在は結婚に拘らず「パートナー生活」という名の同棲も取り入れ、皆が納得しやすい緩やかなスタイルとして「二人暮らしの実習」を提案されています。

朝から貴重な話を聞き逃すまいと必死で耳を傾けていましたが、最後にそれまでと違う視点から「本人中心の福祉とは」を考えさせられたことで、会場全体がほっこりした雰囲気に入れ、和やかに終了した第4分科会でした。

**第5分科会「地域育成会の活性化」  
～育成会活動の活性化～**

**理事 松村 ユカ**

テーマは『育成会活動の活性化』第一部「防災と育成会」第二部「活力ある育成会のために」の二本柱で進められました。まず、第一部は熊本からの発信と題して九州ルーテル学院大学教授前熊本県立熊本支援学校長栗原和弘氏の講演からスタートしました。

災害時、一般の避難所は利用しづらいので、福祉子ども避難所を設定。特別支援学校を活用し、合理的配慮の提供やストレス軽減、またそれを可能にするための人材育成とマニュアル策定等、障がい者にとって伝わりやすく解りやすい情報伝達の方法を相談窓口を整備したそうです。受入対象者は、指定避難所への非難が可能な障がい者の方を除く特別支援学校在校生とその家族が主です。

災害は何時なるとき起こるか予想が付きません。

「自助」の意識を高めるとともに、地域住民との「共

**【全国大会 第5分科会】**



助」により、安心して自宅近くで避難生活が送れるようにするために自治活動等への「支え合う関係性」の構築が最も重要だと最後に締めくくられ、次の講演へと続きました。

次は、『防災とインクルーシブ』と題し、くまもとクロスロード研修会の発表でした。「クロスロード」とは、日本語では“分かれ道”と訳されます。ここで使う言葉の意味は、防災を「他人事」ではなく「我が事」として考え、同時に相互に意見を交わすことを狙いとした集団ゲームです。例えば、「あなたは市役所の職員。未明の大地震で自宅は半壊状態。幸い怪我はなかったが、家族は心細そうにしている。電車も止まり出勤には歩いて2～3時間が見込まれる。出勤する(YES)、出勤しない(NO)という二者択一のゲームです。

しかしこれには正解はありません。あくまで多くの人が受け入れることのできる結論を引き出し、実行に移していくための作業をいざというときになってから慌ててやるのではなく、事前に行っておこうとすることが目的です。性質の違う防災教育教材を利用目的に応じて組み合わせる使うことが大切と思われます。このゲームは商標登録され市販されているオリジナルアイテムです。利用に際しては参考書が数種あり、WEBでも開設されているので、興味のある方々は、そちらも参考にとこの公演を終わられました。

第一部の最後は、熊本市手をつなぐ育成会山中恵子さんの『熊本地震における育成会の取組』というお話でした。災害時、育成会として何ができるのか？他府県の災害の時は残念ながら他人事でしたというところから始まり、今度は被災者となった時、どんな支援が必要かと他の会員の方々と協力して動かれたそうです。まず、会員さんの安否確認、そして不足する生活支援を様々なパイプを通じて行いました。常に記録をとり、情報の収集作業も行い、この2本柱で震災を乗り越えたとお聞きしたときは、どれだけの作業量だったのだろうと、一瞬、気が遠くなりました。ここでも「自助・共助・公助+近所」が大切で、他人の不幸のうで自分の幸福を築いてはいけないと辛口で締めくくられました。

第二部はシンポジウムで活力ある育成会のためにをテーマに、全国手をつなぐ育成会連合会の久保会長をコーディネーターとし、地域育成会の活性化、つまり、連合体であるので、各育成会がそれぞれの目標を持ち、決して仲良しクラブにはならないチームや組織づくりが重要との話しがなされました。